

琉球大学学術リポジトリ

書評『日本語教師のためのTIPS 77②
ICTの活用』(山田智久著 くろしお出版)

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2013-06-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 美奈子, Takahashi, Minako メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/26536 |

書評『日本語教師のためのTIPS 77② ICTの活用』 (山田智久著 くろしお出版)

高 橋 美奈子

0. はじめに

本書のタイトルにある「ICT」という言葉を聞いたことがない方であっても、日常生活ではパソコンを使って文書を作成し、デジタルカメラで人物や風景の写真を撮り、さらにはウェブで調べものをしたり、ブログを書いたりしている方もいるだろう。つまり、わたしたちは多かれ少なかれ、既にICTを活用した生活をしているのだ。ICTとは、本書によると「Information and Communication Technology (情報通信技術)」の頭字語であり、「パソコンやデジタル機器など」を意味すると言う。

では、著者が本書を執筆した理由は何か。ICTはこれほどまで我々の生活に欠かせないものであるにも関わらず、「ICTをどのように活用すればいいのかについて、誰も教えてくれない」(p.4) ことによる。

今現在、日本語教師としてバリバリと活躍されている世代の方で、学校教育においてパソコンの使い方を習った経験がある方は非常に少ないのではないだろうか。なぜなら、学校教育で情報活用能力を育成することの重要性が初めて示されたのは、平成元年(1989年)告示の学習指導要領においてであり、その後、平成10年(1998年)告示の学習指導要領において、ようやく中学校と高等学校で科目「情報」が必修化された(文部科学省 2010)からである。

このように平成に入ってから学校教育で扱われ始めた情報教育ではあるが、パソコンや携帯電話を始めとする多種多様なデジタル機器の普及により、社会的なニーズは増すばかりだ。当然のことながら、日本語教育現場においても、黒板の代わりにパソコンやプロジェクターを使い、パソコンで作成した教材・教具を授業で使う人を目にする機会が増えた。こうした時代の変化とともに、日本語教師として必要とされる知識・能力にも「情報」という言葉が現れることになる。事実、1985年に出された日本語教員養成に求められる教育内容には「情報」という項目はなかったが、2001年に出された新たな教育内容には「言語教育と情報」という区分が加えられた。「言語教育と情報」の具体的な内容は、教材開発、教材選択、教育工学、システム工学、統計処

理、メディア・リテラシー、情報リテラシー、マルチメディア・・・と続き、キーワードには、教材、教具、メディア、コンテンツ、ネットワーク、視聴覚情報、言語コーパス、CAI/CALL/CMI、衛星通信、ファシリテータ、知的所有権、著作権などが挙げられている。

また、教育内容の変更に伴って、日本語教育能力検定試験の出題範囲にも「言語教育と情報」の区分が設けられ、主要項目として(1) データ処理、(2) メディア/情報技術活用能力、(3) 学習支援・促進者の養成、(4) 教材開発・選択、(5) 知的所有権問題、(6) 教育工学が挙げられている。さらに、日本語教育辞典を見ると、『日本語教育辞典』（1982）と『日本語教育辞典（縮刷版）』（1987）の「日本語教材」の項目には、ICTに関する教材として録音テープ（カセットテープ）、ラジオのニュース、映画やテレビなどをVTR化したもの、OHP（オーバーヘッドプロジェクター）は紹介されているものの、索引には「コンピュータ」という項目すら見られなかった。一方、『新版 日本語教育辞典』（2005）では、目次構成の一つの分野として「教育・学習メディア」の分野が加えられ、コンピュータ、インターネット、電子メールの項目だけでなく、メディア・リテラシーや情報リテラシーなどの項目も追加されている。

しかしながら、日本語教育分野におけるICTに関わる必要性や用語が分かったところで、冒頭の引用に戻るが、「ICTをどのように活用すればいいのかについて、誰も教えてくれない」（p.4）のである。我々の身の回りにはデジタル機器があふれていて、否が応でも目にしたり手にしたりする環境にある。そのような中で、実際に手にしてみればみるほど、トラブルは尽きない。著者も「はじめに」（p.5）で、ICTと日本語教育の問題を次のように整理している。

- (1) 誰もICTについて体系立てて教えてくれず、
- (2) ICTに関する本を読んでも自身の教育現場と結びつかず、
- (3) 何から始めてよいかわからない状態となる。

本書は、まさにこうした日本語教師の悩みに答えるべく生まれた書であると言える。実際に、本書の内容は全て現職日本語教師から著者本人が受けた質問への回答に基づいているという。本書は、現職日本語教師のICTに関しての「知りたい！」が詰まった本なのだ。

ただし、一般的なICT関連の書籍は、デジタル機器を三種の神器のごとくに扱い、やみくもに活用を推奨している一方で、本書はICTの活用を批判的な視点から捉え、必要がなければ使わなくてもよいというスタンスをとっている。本書では、ICTに頼

らずとも、学習者と心が通ったわかりやすい授業ができるようになることが教師にとっては何よりの優先事項であり、「アナログ<デジタル」の方程式が成り立つときのみにも補足的に活用できる術としてICTがあると説いている。この点は、これまでのICT関連の書籍には見られない特徴であるだろう。

1. 本書の構成

本書は次のような構成とページ数である。

TIPSシリーズの刊行にあたって・はじめに・お読みいただく前に・目次 (pp.3-10)

Chapter 1 ICTの基本について学ぶためのTIPS (pp.11-34)

Chapter 2 授業の準備と教材作成のためのTIPS (pp.35-96)

Chapter 3 授業中にICTを活用するためのTIPS (pp.97-170)

Chapter 4 情報検索と情報整理のためのTISP (pp.171-218)

Chapter 5 日本語教育で使える便利なフリーソフト (pp.219-238)

Chapter 6 パソコントラブルを解決するためのTIPS (pp.239-272)

Chapter 7 ICTの可能性について考えるためのTIPS (pp.273-301)

各Chapterには、6～20のTIPSが盛り込まれている。TIPSとは、日本語教師にとって「知っておいてほしい」「知っておくと得をする」「知っておかなければならない」などの情報を指すという。一つのTIPSは大体2～6ページ以内で完結しており、必要な情報を素早く入手できる。また、各TIPSの最後には重要なPOINTも整理されている。本書は、いずれのChapterやTIPSから読み始めても問題なく構成されており、読者の必要性に応じて活用できる。

また、各TIPSには、図や写真などの視覚情報が豊富に採り入れられている。特に、パソコン操作は言葉だけの説明では初心者には操作が困難であるが、本書はパソコン画面のスクリーンショットが説明の順を追って表示されており、動画を見ているかのように詳しい。

さらに、各TIPSには関連情報として、関連サイトや文献も紹介されているので、既にICTを授業で活用している方にも役に立つ情報が満載である。

2. 本書の内容

本書は、「日本語教師に必要なICTリテラシーの基礎から実践までを体系立てて学ぶことができるようになって」（p.5）いるという言葉通り、現在一般的に使われている幅広いデジタル機器やICTシステムの知識と技能を網羅している。

まず、Chapter 1では、ICTの仕組みを身近なものに例えて説明している。とかく、ICT関連の用語はカタカナや横文字が多いので、言葉だけでは意味が分かりづらい。しかし、「CPU」は脳の回転の速さのこと、「メモリ」は机の広さ、「ハードディスク」は引き出しの大きさと言われると、意味だけでなく、その機能も明確に理解できる。さらに、Chapter 1には、ICTの用語の説明だけでなく、デジタル機器を購入の際の具体的なアドバイスがある。パソコン、デジカメ、プロジェクター・・・とデジタル機器だけでも数多くあるが、家電量販店に行くと、その種類たるや余りある。本書では、日本語教師が授業で使うことを前提として書かれているので、その目的に最も適した機種を紹介してくれているのは大変ありがたい。さらに、初心者はパソコン操作の全てをマウスに頼りがちであるが、日本語教師がよく使うであろう便利なショートカットも紹介されており、今後の作業効率が上げられるような配慮がある。

Chapter 2は、教材作成に便利なWord、Power Point、Excelの操作方法が紹介されている。日本語教師であれば、一度は練習問題や動詞の活用表（カード）、漢字クイズ、絵カード等の教材を作ったことがあるだろうが、それらをWordやPower Point等を使って作る方法を紹介している。もちろんこうしたソフトは広く普及しているので、既に教材作成の際に使用している読者もいるに違いないが、「学習者のレベルに応じたフォント選びをする（TIPS 8）」や「クリップアートを使った指示文やイラストは学期中一貫して統一させる（TIPS 10）」といったTIPSを読むと、単にICTを使った教材作りの方法が分かるだけでなく、学習者への細やかな気配りの仕方についても勉強になる。

Chapter 3は、ICTを使って「実際の授業でできること」を数多く紹介している。ただし、実践例を紹介する前に、パソコンを使った授業の事前準備の仕方を紹介することも忘れていない。パソコンを授業に持ち込んだのはいいが、結局、パソコンが思うように動作せず、パソコンに授業の邪魔をされた読者も少なくないだろう。TIPS 24では、授業で使うソフトを事前に起動させる方法やWindowsが勝手に動作してしまうことをやめさせる方法などが紹介されている。

ICTを使った授業例として、評者が目新しいと感じたのは、「デジタルカメラを使っ

て学習者の作文をクラス全体で添削する（TIPS 29）」や「ビデオカメラではなく、デジタルカメラを使って学習者の発表を記録し、その画像を見ながらフィードバックをし合う（TIPS 30）」例である。確かにデジタルカメラは他のデジタル機器に比べ、小さく軽量であるため、授業への持ち運びに便利な機器である。ビデオカメラは、学習者とのデータのやり取りに複雑な手順を踏まなければならないが、デジタルカメラであれば、USBメモリやSDカードを使って容易にでき、学習者と教師と一緒に発話を振り返る機会を増やすことができる。さらに、Chapter 3には、学習者が自律的に学習するためのICT活用する方法も多数紹介されている。例えば、「スマートフォンを活用した発音練習（TIPS 34）」、「作文添削サイトを活用した作文の自己チェック（TIPS 36）」、「ルビのないWebを読むための支援サイトの紹介（TIPS 37）」など、教師の助けなしでも学習できる方法が満載である。

Chapter 4は、情報検索と情報整理の方法が紹介されている。Webの検索エンジンを使って、調べたい用語を検索するのは、パソコン初心者でも知っているかもしれないが、複数の語からなる1つの単語を検索する方法や、検索したい語を何となくしか思い出せない時の検索方法などは、非常に便利な裏技である（TIPS 43）。また、パソコンで教材作成をすると、膨大にファイルがたまって行って、どこにあるのか分からなくなるのは誰も経験することであるが、そうしたファイルの整理方法（TIPS 46）やファイルの検索方法（TIPS 47）も紹介されている。さらに、複数のパソコンにおけるデータやメールの共有方法（TIPS 50・51）の説明もあるので、学校と家庭に複数のパソコンを所持していて、データの共有に困っていた読者には有益な情報である。

Chapter 5では、日本語教育で使える便利なフリーソフトを多数紹介しており、自費で教材や授業準備をしなければならない日本語教師にはありがたい。また、フリーソフトには成績管理を効率的に行うためのソフトの紹介もある（TIPS 60）。本書では、このChapterに限らず、ICTを活用する際にソフトが必要な場合は、必ず有料のソフトのみならず、フリーソフトを紹介してくれるので、非常に経済的である。

Chapter 6では、パソコンを使っている際のトラブルの解決方法を紹介している。「間違っただけで削除してしまったファイルの復元（TIPS 64）」や「プロジェクターのトラブル解決方法（TIPS 65）」、「パソコンシステムのバックアップ方法（TIPS 66）」といった、一般的なICT関連のトラブル解決方法のみならず、日本語教師ならではのトラブル、例えば、「漢字圏の学習者の氏名の入力方法がわからないときの対処方法

(TIPS 63)」も紹介されている。また、趣味が掃除という著者だけあって、パソコンの掃除の仕方に関するTIPSもあり (TIPS 67・68)、パソコン操作の効率性への助言も豊富である。

最後のChapter 7は、ICTの可能性について考察するためのTIPSである。このChapterでは、これから日本語教師を目指す方にも有意義な日本語教育関連サイト（日本語教師の就職支援、教材や教案作成支援、日本語教育能力検定試験のための情報など）や日本語学習者の自習を支援するサイトの紹介がある (TIPS 72)。さらに、近年、新たに普及してきたiPadやSNS (FacebookやmixiといったSocial Networking Service) の活用方法も紹介している。

3. おわりに

本書は、まるでマジシャンの種明かし本を読んだ後かのような読後感を与えるだろう。近年、ICTを取り入れた授業をしている日本語教師は多いが、評者はそうした授業を見るたびに、「どうやってこの教材を作ったんだろう」「どうやって授業中にこんなにもテキパキとデジタル機器の操作ができるんだろう」という疑問が尽きなかった。また、見よう見まねでなんとかパソコンで教材を作ってはみたものの、分からないことやつまずくことが数多くあり、結局、パソコンに詳しい著者に電話やメールで聞く始末であった。しかし、本書のおかげで、パソコンと格闘した長年のこうした疑問が見事に晴れた。なんという爽快感であろうか。

最後に欲を言えば、索引をつけていただきたかった。デジタル機器を使用していると、聞き慣れない、見慣れない用語に振り回されることが多々ある。そのときに、その用語を索引で引くことができれば、本書はICTを活用するための実用書にとどまらず、ICT活用のための辞典としての役割も担えるのではなかろうか。

また、著者が最後のTIPS 77で述べているように、今後も間違いなく、多種多様なデジタル機器やICTシステムが登場するであろう。そのためにも、テクノロジーの発展とともに、本書の続編も定期的に刊行されることを希望したい。こんなことを言うと、「機械に振り回されず、人に頼らず、自律してICTを活用できる教師を目指すためにこの本を書いたのに・・・」と著者から怒られそうではあるが、評者の本音として許していただきたい。

結論として、本書を読めば、「食わず嫌い」ならぬ「ICTの未活用嫌い」の読者であっても、「ちょっとこれやってみようかな」と重い腰が動くことは間違いない。本

書を読んで、一緒にデジタルに負けない日本語教師を目指しましょう。

参考文献

- 文部科学省（2010）『教育の情報化に関する手引』文部科学省
日本語教育学会編（1982）『日本語教育辞典』大修館書店
日本語教育学会編（1987）『日本語教育辞典（縮刷版）』大修館書店
日本語教育学会編（2005）『新版 日本語教育辞典』大修館書店

（琉球大学教育学部生涯教育課程子ども地域教育コース）